が確認でき、それを裏づけることとなった。

西隆寺（第299次）では、造営以前に存在した一条条間北小路、西二坊坊間西小路を調査した。また、古墳時代と考えられる掘立柱建物を確認した。

西大寺（第294次）、薬師寺（第293-8次）では、中世の貴重な資料を提供することとなった。

平城宮北方（第293-3次）では、掘込地業が確認され、宮北方の土地利用のありかたが伺える。

大乗院（第300次）では、絵図にある舟溜まりへの入り込み部と推定される池北岸部の様相を明らかにした。

なお、発掘調査の現地説明会を以下の通り実施した。

（金田明大）

6月13日	第292次（東院地区）	清野孝之
9月26日	第295次（第一次大極殿院）	蓮沼麻衣子
11月21日	第297次（興福寺中門）	次山　淳
2月20日	第298次（馬寮東方官衙）	玉田芳英

建造物の調査と研究

古代建築の調査研究　従来から継続している本研究は、とくに本年度から、これまでに蓄積された建築に関する調査研究、建築部材の出土遺物、保存修理工事の成果などをもとに、所内の共同研究として細部にわたる古代建築の技法の研究を中心に行うこととした。

当年度は瓦と屋根葺き仕様、礎石と基壇、木材加工と仕上げに関する調査をすすめ、とくに瓦と屋根葺き仕様の研究を中心とした。平城宮で用いられた丸瓦と平瓦の寸法、面戸瓦・隅木蓋瓦・熨斗瓦などの形状と寸法と納め方、さらに、軒先・軒隅・大棟・けらば・降棟・隅棟など各部の屋根葺き仕様も考察した（56〜57頁参照）。今後は、木部の継手と仕口の形状、鴟尾の意匠と構造・大きさ・納まり、飾り金具の素材・加工・仕上げ・意匠、土壁の構造・材料構成・仕様、彩色などについて行う予定である。

また、東大寺転害門については、昨年の実測と観察からさらに考察をすすめ、昭和期の解体修理がどのように行われたかを、部材の取替の観察や精算書にみる施工方法などから分析し、忠実な現状維持とする方針であったことを確認し、その具体的な方法を明らかにした。

建物の調査は、海竜王寺五重小塔（軒廻り）、同西金堂（敷石）、唐招提寺金堂（鴟尾、小屋組）、平等院鳳凰堂（翼廊）、恭仁宮大極殿跡（階段、基壇、礎石）、大宰府正庁跡（礎石と平面）などを行った。

平城宮建物復原実施にともなう調査研究　大極殿の復原実施設計に関して、構造実験用の原寸土壁模型の製作、次年度に実施する1／5の構造模型と屋根葺き実験用の原寸瓦葺き模型などの計画、実施設計図面の作成などにあたり監修を行った（63頁参照）。朱雀門脇の築地大垣復原施工の監修では、材料の選択、原寸図作成並びに木材加工、瓦などの原型作製、施工経過を確認した。

木造建造物の保存修復のあり方と手法に関する調査研究　本年度から7年計画で発足し、4部会からなる（50頁参照）。部会1は保存修復の体制確立のための研究とし、多様化する文化財建造物に対処する新たな体制と組織の研究。部会2は保存修復に関する考え方と手法の研究として、過去の修復を評価するとともに、多様化する文化財の今後の保存のあるべき考え方や方法をさぐる。部会3は参考となる海外の事例を調査研究する。部会4は保存事業にともない蓄積された学術資料の整理と保存活用方法の研究とし、文化庁ほかに収蔵された保存修復時の資料を再評価し、今後の活用方法を研究するものである。

各地の史跡の整備事業（建物復原）への助言・指導　新居関（新居町）、崇廣堂（伊賀上野市）、近江国庁（滋賀県）、津山城（津山市）などの遺跡整備における建物復原に関する助言・指導を現地において行った。

各地の文化財建造物の修復事業への助言・指導　大阪中之島公会堂（大阪市）、春日大社、今井町（橿原市）、脇町南町（脇町）、山口県旧県会議事堂（山口県）、西田橋（鹿児島県）などの保存修復にあたり、現地において助言・指導した。

（木村　勉）

書跡資料の調査と研究

継続して行っている南都諸大寺の書跡資料の調査は、1998年度は興福寺、薬師寺、法隆寺で行った。興福寺は『興福寺典籍文書目録第三巻』収録分である経函第61函以降のうち、第61、72、78函など調査未了であった分の調書を作成し、現在未撮影分の撮影を進行中である。

内容は、第61、72函は論議草、第76函は法華経である。薬師寺は特別研究欄で述べる。法隆寺は、寺側が進めている昭和資財帳作成の調査に協力するかたちで、古文書

についての調査を従来から行ってきた。長櫃などに収められている多量の未整理の文書が存在するが、その調査には長期間要すると思われるので、古文書については戦前に荻野三七彦氏により整理され、それに基づいて成巻されたり、冊子本として修理されたりした古文書群の目録を作成し、『法隆寺の至宝８　古記録古文書』として刊行された今回の資財帳に古文書目録として収録した。その他に南都では、現在県教委が行っている県下の中国や朝鮮の版経や文化庁の東大寺修二月会資料の調査に参加した。その他文化庁、教育委員会、寺などが行った京都醍醐寺聖教、京都冷泉家典籍文書、京都東福寺文書、京都仁和寺聖教、滋賀石山寺聖教、東京国立博物館法隆寺献納宝物などに参加協力している。ここ数年、調査に参加協力をしてきた滋賀永源寺文書、京都興聖寺一切経、奈良西大寺元版一切経の調査は終了し、それぞれ教委などで報告書が刊行された。

上記の調査のうち仁和寺は、奈文研で1950年代から調査を行っており、その成果として御経蔵・塔中蔵聖教、塔中蔵階下書籍について罫紙の目録を作成している。現在、御経蔵につき、その目録を再確認したものを作成中である。古文書料紙関係の調査では、共同研究グループとともに、今年度は和紙製作の現地（京都黒谷、高知伊野）に行き和紙製作工程を実見した。そこで原本調査でデータとして収集している簀目、糸目、刷毛目、板目など料紙に残っている痕跡と工程、料紙の表裏などとの関係を確認した。また漉返紙をいろいろな条件で製作し、古文書現物の宿紙などとの色調の比較などの調査を行った。これら和紙製作の工程で実見しての認識を古文書調査において古文書の原本で再確認したいと考えている。

（綾村　宏）

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターにある６研究室と情報資料室、および各研究員がそれぞれの課題を定めて進めている研究があり、多くは前年から継続しているものである。1998年度には次のものがある。これらのうち、いくつかについてその内容を紹介しよう。

縄文編年の学史的研究/古代地方末端官衙遺跡の研究/古代豪族居館遺跡の研究/動物遺存体による生業活動の復元的研究/遺跡土壌の微細形態学的研究/年輪による古気候の復元的研究/年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明/広域遺構探査法の開発研究/東アジア古代の庭園遺構の比較研究/常時微動測定による古建築の構造に関する研究/木・石造文化財の経年変化に関する研究/有機質遺物の材質分析とその保存処理法の開発研究/劣化写真のデジタル画像による復元/全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する研究/文化財情報ネットワークにおける通信法の研究/遺跡地図情報システムの開発研究/南アジア仏教遺跡の研究/唐代壁画の技法的研究/陶磁器文化の交流に関する科学的研究/日韓古代における埋葬法の比較研究

埋蔵文化財関係情報処理の現状　奈文研ホームページに対するアクセスは、１ヶ月2000件を越えるところまで増加してきている。一般からの関心の高まりに対応できるよう調査部から発掘調査速報のデータをいただき、すみやかな掲載に努めている。所内向けのデータベースについても、インターネット対応への準備を進めている。出土木製品のデータベースなどについては利用できるようになっている。

全国不動産文化財情報システムの現状　近年、発掘調査報告書は内容の要約にあたる抄録を備えるようになってきている。整備を進めている遺跡データベースにこのデータを盛り込む作業を開始し、1995年度分より順次入力作業を進めている。その他、種々の遺跡地名表や遺構・遺物の一覧からもデータの入力を行っており、有益な情報の蓄積を図っている。

年輪年代法による八ヶ岳大崩壊の年代解明　長野県北部を流れる千曲川流域には、砂層に覆われた平安時代の遺跡がいくつも確認されている。この砂層は、「仁和四年」の八ヶ岳（稲子岳）大崩壊によって発生した泥流が千曲川に流入し、下流域まで氾濫したものだと推測されている。実際、現地を調査すると千曲川沿いの各所でヒノキやスギの埋没樹幹を発見することができる。目下、河内普平教授（信州大学教育学部）と共同で年輪年代法に好適なサンプルを探索し、暦年代確定に向けての研究を進めており、遠からずその年代は明らかになるであろう。

金属製遺物の保存科学的研究　金属製遺物における金鍍金の色調を定量化するための基礎実験をはじめた。鍍金層は各種の要因が影響して微妙に色調が変化することが知られている。今回は予備実験として双六古墳から出土した馬具類のクリーニングを終了した遺物などを用いて、分光測色計による反射スペクトルのデータを収集した。その結果、分光スペクトルの特性にはあまり変化がみられないものの反射率にその差が認められた。　（工楽善通）